

令和元年6月21日現在

機関番号：37402

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07312

研究課題名（和文）進化的アプローチによる自律・責任概念の研究

研究課題名（英文）An evolutionary research of the concepts of autonomy and responsibility

研究代表者

宮川 幸奈（MIYAGAWA, Yukina）

熊本学園大学・経済学部・講師

研究者番号：90806035

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、教育（哲）学の重要概念である自律と、その構成要素とも言える責任の概念について、人間の行動や思考を進化によって実現したものととらえる哲学や人間諸科学の知見を踏まえて検討し、それらの概念に関わる教育的実践の意味をとらえ直そうとするものである。特に二重過程理論を参照することによって、自律という教育目的において、理性や意識と、感性や無意識という一見対立する諸要素が複雑に絡み合っていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年の教育哲学領域における自律概念の研究は、「自律した主体」が近代的虚構であるという認識のもと、近世・近代の文献研究を中心に行われてきた。これに対して、本研究が採る進化的アプローチは、自律・責任といった近代的虚構が成立した条件を、ヒトの登場以前まで遡る進化の過程を踏まえてとらえ直そうとするものである。本研究は、自然主義（科学的知見や科学的方法を用いながら哲学をすること）という、近年盛り上がりを見せる哲学的立場を教育哲学領域に採り入れるものとしても意義を有する。

研究成果の概要（英文）：This research aims to properly grasp educational practices related to the educationally important concepts of autonomy and responsibility by examining these concepts based on philosophical or scientific researches which regard human behaviors and thoughts as realized evolutionally. As the major fruit, by mainly referring to dual process theories, this research elucidated that the reason and the consciousness, and the sensibility and the unconsciousness are intertwined in autonomy as the aim of education although these elements are seemed to be opposed.

研究分野：教育哲学

キーワード：自律 責任 進化 自然主義

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

被教育者の自律、すなわち被教育者が自ら立てた規範に従って行為することは、近代以降の教育(学)が目指し続けてきたことである。この自律概念について、教育哲学領域においては、とりわけ自律と他律のパラドックス(未だ自律していない子どもを自律させるためには教育という他律が必要だが、「自律せよ」という他者の命令に従う限り子どもは他律状態から抜け出すことができないということ)をめぐって多くの研究が重ねられてきた。

しかしながら、20世紀後半の人間諸科学やいわゆるポストモダンの諸言説は、人間が自律的な主体であるという見方に対して異議を申し立ててきた。すなわち、個人が外部環境や他者に大きく影響を受けていること、あるいは外部環境や他者の影響によってはじめて個人が成り立っていることが指摘され、「自律的な主体」の虚構性が論じられてきた。こうした見方は教育哲学領域にも行き渡っており、特に近代教育(学)批判の文脈では共通認識となっていると言っていよう。例えば、鈴木晶子は『イマヌエル・カントの葬列 教育的眼差しの彼方へ』(春秋社、2006年)において、フーコーFoucault, M. など近代的人間観を相対化する思想を参照しつつ、自律した主体を近代のフィクション(虚構)ととらえ、その成り立ちを思想史の観点から探っている。

こうした学術的状况の中で、研究代表者はこれまで、私たちが生きる社会において自律という虚構が成り立っている仕組みについて、分析哲学や法哲学、政治哲学等の文献を広く参照し、研究を続けてきた。その際、自律概念と深く関連する責任や自由の概念に着目した。これまでの研究の成果として、自律した人間であるかどうか、あるいは責任を問うに値する人間であるかどうか、個人の属性や能力によって決まるものではなく、人間同士の関係の中で定まることと、

自律した人間や責任を問うに値する人間を同定するにあたって、大人/子どもの区分が重要な役割を果たしていることを明らかにしてきた。

研究代表者は、これらの研究成果を発展させ、自律・責任概念に関する研究をさらに深めたいと考えた。とりわけ、自律や責任が虚構的であるにもかかわらず、人間が自らを自律した人間や責任を問われ得る人間と見なし振る舞うようになる過程を解明したいと考えた。その方法として本研究で採用したのが、進化の過程を踏まえた探究(進化的アプローチ)である。進化的アプローチによって自律・責任概念について研究するという本研究の着想は、これまでの研究において、人間の行動や思考を進化によって実現したものととらえる哲学研究を参照する中で得られた。そのような哲学の成果であるデネット Dennett, D. の諸著作(山形浩生訳『自由は進化する』NTT出版、2005年等)や戸田山和久の諸著作(『哲学入門』ちくま新書、2014年等)から、申請者は、進化的アプローチによる研究が、自律・責任概念に関してこれまでの教育(哲)学領域にはなかった有益な視点を少なくとも2つもたらすという考えに至った。1つ目は、近代研究にとどまらない長い時間的展望のもとで自律・責任概念とそれらに関わる実践をとらえる視点である。前述の通り、教育哲学領域において、自律の虚構性が指摘されてきたのは近代批判の文脈においてであり、虚構の成り立ちを解明するために主に近世・近代の文献研究が行われてきた。これに対して、進化的アプローチは、自律・責任といった近代的虚構が成立した条件を、ヒトの登場以前まで遡る進化の過程を踏まえてとらえ直す可能性を拓くのである。2つ目は、個体発生過程をも進化の産物をとらえる視点である。進化的アプローチは、諸生物の個体がそれぞれに「一人前」の成体になるために他個体や外界と関わる仕方や、未熟な個体に成熟した個体が関わる仕方自体が、進化の過程で変化してきたことを明らかにしようとしている。こうした研究は、人間の教育的実践のとらえ方を大きく変え得るものだという見通しの下、本研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究は、教育(哲)学の重要概念である自律と、その構成要素とも言える責任の概念について、進化的アプローチによって検討し、それらの概念に関わる教育的実践の意味をとらえ直すことを目的としてきた。具体的には、人間の行動や思考を進化によって実現したものととらえる哲学や人間諸科学(生物学の哲学や進化心理学)の研究を参照し、人間にとって自律・責任の概念が持つ意味や、子どもが自律した人間や責任を問われ得る人間として振る舞うようになる過程、その過程における大人(教育者)の役割の解明を目指した。ただし、進化的アプローチを人間研究に適用することは、それ自体がまだ評価が確定していない新しい研究手法であり、教育(哲)学領域にはほとんど持ち込まれていない。そこで、本研究では、進化的アプローチを教育(哲)学に採り入れることの利点や留意点、限界についても同時に吟味することとした。

3. 研究の方法

(1) 人間に関する進化的アプローチによる哲学・科学研究を踏まえた、自律・責任概念の意味についての検討

近代(教育)思想においては、カント Kant, I. の思想に典型的に表れているように、自律・責任は人間を他の生物とは異なる存在として特徴づける概念であった。これに対して、人間の行動や思考を進化によって実現したものととらえる哲学や人間諸科学は、自律・責任概念と関係の深い、意図や目的を持つという事態について、他の生物との連続性に着目して探究している。認知科学や進化心理学、生物学の哲学といった領域にまたがるこうした研究を踏まえ、自律・責任概念について、これまでの教育(哲)学と異なるいかなる理解が得られるのかを考察した。

(2) 子どもが自律した人間や責任を問われ得る人間として振る舞うようになる過程と、その過程における大人（教育者）の役割についての、進化的アプローチによる検討

(1)で明らかにした自律・責任概念の理解に即して、人生の初期には自律した人間・責任を問われ得る人間とは見なされていなかった子どもが、自律・責任概念に関わる実践に参入していく過程について考察した。その際、諸生物の個体がそれぞれに「一人前」の成体になるために他個体や外界と関わる仕方や、未熟な個体に成熟した個体が関わる仕方自体の進化に関する諸研究の内容も確認した。

(3) 進化的アプローチを教育（哲）学に採り入れることに関する批判的検討

進化的アプローチを人間研究に適用することは、1970年代に始まった新しい研究手法である。そのため、評価が確定しているとは言い難く、誤った適用がなされることや、妥当な適用でありながら誤解を持たれることも多いようである。こうした懸念について、科学哲学や進化的アプローチの内部でなされている議論を確認した。それを踏まえて、進化的アプローチを教育（哲）学に採り入れることの利点や留意点、限界について批判的に吟味した。また、(1)(2)の研究成果を従来の教育哲学研究（近現代の教育思想研究や発達論をめぐる研究）と照らし合わせ、進化的アプローチによって新たに明らかにすることができた点と、扱うことができなかった点を整理した。これらの作業を通して、進化的アプローチを教育（哲）学へ導入することの意味や、導入に際して考慮すべき論点について考察した。

4. 研究成果

(1) 二重過程理論を参照した「自律を目指す教育」の分析（雑誌論文）

本研究の最大の成果は、二重過程理論 dual process theories を参照することによって得られた。二重過程理論とは、人間の心の働きを認知・情報処理のための二つのシステムによって説明する理論であり、進化的アプローチを採用する科学者・哲学者も多く支持しているものである。この理論の言う「システム 1」は、直観的で意識の働きを必ずしも必要とせず、進化的に古く、ヒトが他の生物と共有している過程だとされる。システム 1 の働きを表すためにヒューリスティクス heuristics（精度は十分とは限らないが、正解に近い解を得ることができる簡単な方法）という語が用いられており、ステレオタイプに基づく判断などがここに分類される。ヒューリスティクスは誤った判断を導き出すおそれがあるが、私たちが日常的なあらゆる判断について関係するすべての情報を集めて精査する時間を持ち合わせていないことからすると、かなり実用的なものだと言える。他方「システム 2」は、熟慮的で意識の働きを必要とする過程であり、これを発達した形で備えているのはヒトのみだとされている。様々な領域の刺激・情報を関連付け、総合して判断する過程であるシステム 2 は、システム 1 よりも判断に時間がかかるが、変化の激しい環境（予め備えられた刺激と認知・行動のパターンだけでは対処が難しい環境）では生存のために役立つ。ヒトは進化の過程でシステム 2 を獲得することによって地球上の様々な環境の中で繁栄し、今や互いに高度にシステム 2 を作動させなければ対処できない社会的・制度的環境を自ら作り上げている。これが二重過程理論の典型的な見解である。二重過程理論は、感性や無意識と言われてきた働き（システム 1）が人間にとっていかに重要であるかを明らかにするとともに、それらと意識的な理性の働き（システム 2）の相互作用についても論じている。

自律をめぐる近年の教育（哲）学研究では、感性（感情・情動など）や無意識の働きもまた、教育学的な自律概念と関連する要素として論じられるようになってきている。しかしながら、自律に関する議論の全体的な傾向としては、依然としてその中心に据えられているのは理性や意識の働きである。

本研究は、二重過程理論を参照することによって、感性や無意識といった要素と自律との関連や、感性や無意識と、理性や意識という一見対立する諸要素が、自律という教育目的の中で絡み合う様について、従来の教育（哲）学研究よりも明確に描き出すことができた。すなわち、カント以来の自律に関する議論が、システム 2 と重なる意識的な理性の働きを強調してきたのに対して、システム 1 と重なる感性や無意識の働きもまた教育学的自律概念の不可欠な要素であることを確認した。

そもそも、システム 2 的なもののみによって教育学的な自律概念を説明しようとするならば、私たちはおよそ実現不可能な教育目的を掲げていることになってしまう。なぜなら、二重過程理論に基づく議論は、システム 2 がシステム 1 を完全には制御できないことを明らかにしてきたからだ。例えば、システム 1 によるヒューリスティクスは、ときに様々なバイアス（ヒューリスティクスによって人間が無意識に陥ってしまう誤りや非合理性の傾向）を引き起こすが、これをシステム 2 によって完全に回避することは不可能だというのが、多くの研究者が一致する見解である。その理由の一つとして、システム 2 はシステム 1 に比べて長い時間と意識的な努力を要し、同時に複数の情報を処理することができないため、全ての判断をシステム 2 によって行うことは不可能であることが挙げられている。また、システム 2 が、システム 1 を制御するどころか、しばしばシステム 1 を合理化・正当化していることも指摘されている。人々が自らの判断について理由を述べることは、システム 2 がシステム 1 を制御した上で判断を下した証だと思われがちだが、実際にはシステム 1 による直観的な判断をシステム 2 が追認している場合が多いという。

二重過程理論からは、教育目的として掲げられる自律がシステム 1 の一定の働きを前提とし

ていることも読み取ることができる。例えば、心理学・神経科学と倫理学を融合させて道徳を研究しているグリーン Greene, J. (竹田円訳『モラル・トライブズ 共存の道徳哲学へ(上・下)』岩波書店、2015年)は、他者を思いやる振る舞いや集団内の公正さを重んじる振る舞いは、集団内の協力を促進するがゆえに進化してきた道徳的判断のオートモード(システム1)であり、「人間性を単なる手段として扱ってはならない」というカントの定言命法はいわゆる理性(システム2)が独自に生み出したものではなく、進化の過程で備わった情動(システム1)の傾向を追認したものだとしている。そのため、熟慮の末に道徳的な直観に反する行為を選択することは、自律と見なされないこともあり得る。私たちに、システム2が一定の範囲(常識や良識などと言われるもの)のうちに収まる結論に至る場合にしか自律と認めない傾向がある。あるいは、一定の範囲内の結論に至らなかった場合には他者がシステム2を働かせたことを認めない(それゆえ自律しているとも認めない)傾向がある。そこで自律の範囲を定めているのは、システム2よりもむしろ1だと考えられるのだ。

以上のように、二重過程理論を参照することによって、自律という教育目的において感性や無意識と、理性や意識という一見対立する諸要素が複雑に絡み合っていることが明らかになった。

本研究はさらに、二重過程理論を踏まえて、子どもを自律・責任概念に関わる実践に参入させるための大人(教育者)の働きかけを、「システム1のための教育」と「システム2のための教育」として理念的に示した。システム1のための教育という語で言い表しているのは、被教育者にその社会で共有されている一定の価値基準(常識や良識)を直観的に認めるように促すような教育者の働きかけのことである。意識的な理性の働きを中心に据えた議論においては、被教育者を自律させるための教育者の働きかけとして、「自律せよ」と命じて熟慮を促すこと(システム2のための教育)が主に想定されてきた。だが、一定の常識や良識を備えて判断を下さなければ人間は自律者だとは認められないことを踏まえると、被教育者のうちに「適切な」直観を育む教育者の働きかけもまた、自律を目指す教育の欠くことのできない一面だととらえなければならぬ。もっとも、ここで示した二つの側面は理念的なものであり、具体的な教育場面においては、それぞれのシステムのための教育が純粋な形で行われることは不可能であるように思われる。その実相を解明することが今後の課題として残された。

なお、二重過程理論は、広く自然主義的な哲学者から支持を集めている理論である。哲学における自然主義とは、科学的知見や科学的方法を用いながら哲学をすることを指しており、1960年代以降、英語圏を中心に盛り上がりを見せ、近年は日本でも関心が高まっている。進化的アプローチも、自然主義のうちに含まれる。研究を進める中で、進化的アプローチをめぐる諸課題を自然主義というより広い文脈のうちに位置付けることによって、本研究の見通しはより明瞭になった。

(2) 叱責に着目した「自律を目指す教育」の分析(雑誌論文、学会発表)

1で述べたように、教育哲学領域においては、自律と他律のパラドックスをめぐる多くの研究が重ねられてきた。このパラドックスに陥ることなく、人間が自律した人間・責任を問われ得る人間として振る舞うようになる過程を説明すべく、大人の働きかけを受けながら子どもが自律者として振る舞うようになる原初的過程として、叱責について分析した。この分析の重要な導きとなった青山拓央の論考(『時間と自由意志 自由は存在するか』筑摩書房、2016年)では、叱責が進化の中で人間のみが獲得した営みであることに目が向けられている。叱責の中でも、「否定禁止」すなわち「何かを具体的に禁止することで特定の行為をやめさせるもの」(青山、前掲書、p.248)の理解が、言葉を持たない人間以外の生物には不可能だということである。人間はこの否定禁止を理解できるようになるからこそ、「～ではなく できた」という自由や可能性の下で生きることができる。自由と可能性の世界に生きていることは、自律/他律概念を理解する前提となる。したがって、大人(たち)が、初めは言葉を理解しないがゆえに否定禁止も理解していない子ども(たち)に対して叱責を繰り返す、それによって彼らを自由と可能性の世界に引き入れることは、「自律を目指す教育」の原初的過程と言える。

進化的アプローチは、人間の行動や思考を他の生物との連続性の下でとらえるとともに、人間と他の生物との違いを正確に見定めようとするものでもある。上述の叱責をめぐる分析によって、自律/他律概念や「自律を目指す教育」がどのような意味で人間に固有であるのか、その一端を明らかにすることができた。

(3) 「拡張された心」をめぐる議論を参照した、言語のはたらきに関する考察(雑誌論文)

(2)からもわかるように、自律の達成において非常に重要な役割を果たしているのは言語である。そこで、言語のはたらきをめぐる自然主義的研究の一つである、「拡張された心」をめぐる議論について検討した。

クラーク Clark, A. らによって提案された「拡張された心」というアイディアは、認知をめぐる様々な領域の研究を呼応させながら人間の脳と身体と世界(環境)の結び付きをとらえ直していくものであり、心のはたらきは脳のはたらきのみによって実現しているものではなく、それどころか自らの身体をも超えて、世界(環境)に拡がりながら実現しているのだという大胆な見方を主張している。クラークが、心のはたらきを支える種々の足場の中で特権的な重要性をもつと考えているのが言語である。特に、言語が可能にする「考えることについて考える」という思考こそ、地球上の生物の中でヒトだけが行うことであり、ヒトと他の生物との著しい違いの源であ

ると主張している。

このような言語のはたらきに関する見方は、「自律を目指す教育」が言語を通じてどのように行われているかを解明する上で示唆的である。今後、「拡張された心」というアイデアを参照した本格的な研究を行っていく。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

宮川幸奈「自律と他律への導き方—基礎的過程としての叱責の分析を通して—」『教育基礎学研究』第16号、pp.35-51、2019年、査読有

宮川幸奈「道徳授業における言語活動とその評価をめぐって—「拡張された心」の視点から—」『熊本学園大学教職課程年報』第1号、pp.19-35、2019年、査読無

宮川幸奈「教育目的としての自律に関する自然主義的考察—二重過程理論を通して—」『教育哲学研究』第118号、pp.56-73、2018年、査読有

〔学会発表〕(計1件)

宮川幸奈「叱責の効用—「自律を目指す教育」の基礎的過程に関する分析—」、九州教育学会第70回大会、2018年

6．研究組織

(1)研究分担者

特になし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。